

「かわいいね」って微笑むだけで、相手の興奮を誘う。包容力で焦らす超絶美貌のお姉さん。隣に住んでいる康太とは小学校からの幼馴染。あおいが越してから、あおいとも仲が良い。

◆鈴木 優子（あおい）

- 年齢：21 歳
- 性別：女
- 身長：171 cm
- 体重：52kg
- 3 サイズ：B90/W57/H87(D カップ・モデル体型)
- 乳房：適度な弾力があり、ふっくらと丸みを帯び、動くと軽やかに揺れる。
- 乳首：薄いピンク。乳輪は適度な大きさで、柔らかな茶色。勃起時はくっきり。
- 陰核：平常時 7mm のやや小ぶりで、勃起時は 1.2cm。形はボタン型で先端は常に露出。
- 性癖：クリオナニー、連続絶頂、甘サド、コスプレ、複数プレイ、尿など
- 性感帯：クリトリス、乳首



171cm のスタイル抜群の絶世の美女。黒髪ロングストレートで、髪や揺れると爽やかな甘い香りが漂う。一見近寄りたがたい完璧な美貌ながらも、優しい微笑みと親しみやすさで周囲を包み込み、快活な性格が彼女の魅力を一層引き立て、周りから男女問わずに声を掛けられる。しかし、豊富な男性経験を持ちながらも、これまでに恋をしたことがない複雑な内面を抱えている。

彼女が微笑むだけで、空気が変わる。「かわいいね」——たったそれだけの言葉を、優子はまるで蜜を垂らすように零す。彼女には性的に甘い言葉責めを駆使し、寸止めの快感を与える甘サドの一面を秘めている。美貌を兼ね備えた彼女が相手の心情を悟り、心情を言葉にし、甘い言葉をかけ、相手を肯定しながらも焦らす。そして自らも快感を深く味わう、二面性が彼女の魅力。そんな、彼女の甘サドは、責められたい 2 人を虜にする。「愛されたい」「永遠に気持ちよくなりたい」という欲の深淵へと、優しく、確実に、沈めていく。

葵と康太がどんなに純粋に愛し合っている、優子がそこにいる限り、二人の夜はもう「二人きり」では終わらない。この物語で最も危険で、最も美しい、禁断の“大人のお姉さん”。

射精したいのに動かせない、あたしの右手

くバレちゃダメ…背徳感のオナニーく

ゆうこ姉ちゃんの指が、じつとり濡れた秘所に触れる。

ゆつくり滑らかに動く。

スカートの擦れる音。

あおいの視線は釘付け。

こ…こんなに近くで……こんなに綺麗なゆうこ姉ちゃんが……こんなに…

ゆうこ姉ちゃんは、スカートを下ろし、パンツを脱ぎ、陰部を露出した。

あおいが息を飲む。

初めて見る女性の性器。

綺麗で、少しグロテスクで、濡れて光る。

あおいが目を見開く。

視覚…濡れた陰部、指がクリトリスであろう突起物を撫でる。ゆうこの顔が紅潮、快感に歪む。

聴覚…甘い喘ぎ、吐息、くちゅくちゅ音。

嗅覚…甘い部屋の匂い、ゆうこ姉ちゃんの長い髪から漂う優しいシャンプーの香り、甘く鉄のような湿った熱気。あおいが深く吸い込む。

触覚…スカート越しに抑えたおちんちん、スカートの上から下腹部を抑える。硬く脈打つ鼓動が伝わる。指先が無意識に動く。

味覚…舌の奥が痺れ、口中に熱。唾が重く熱い。

ああいは興奮を抑えられない。

スカートの下、おちんちんが最上級に硬く、盛り上がる。



お茶だけだと思ってたから、無防備……パンツ薄いし、前側は何の保護も入れてない……男の子だってバレたら……

でも、こんな機会、もう二度とない……女の子の……ゆうこ姉ちゃんのオナニー、最後まで見てみたい……

抑えてなきゃ隠せない……見られたらバレちゃう……ここから出なきゃ！

でも、動けない。目が離せない。鼓動が早い。

興奮して……どうしようもない……抑えてなきゃバレちゃう……立ち上がったらバレちゃう……逃げれない……

……あたしも……触りたい……オナニーしたい……したい……したい……！！
微笑みながら指と陰部から流れる淫美な音と静寂が響き渡る。

ゆうこが囁く。

「ああい、もう、隠せないくらいに……勃っちゃってるね。」

「えっ！」

「もう、パンツ、びしょびしょだね。パンツの上からでも汁が糸引いて、こんなに欲しがってるんだね……」

重力に逆らい、パンツは陰茎の形で持ち上げられ、頭側から除いたら、それはもうほとんど露出状態。

左鼠径部に、我慢汁の糸がねっとり垂れ、水たまりが広がり、肌をぬるぬるに汚す。

これは、もう、出ちゃうな……でも、もっと焦らして、泣かせたいのにな……

あおいも同時に思う。

もう、出ちゃうかも…

「脱いじゃおうか。全部、見せて……」

あおいは腰を浮かせた。

「いい子。でも、出しちゃだめよ。わたしが許すまで、我慢しなさいね……」

パンツを脱がせ、解放された陰茎が、下腹部にびたっとくっつき、びくびくと震える。

右手で優しく包む。

熱が一気に溢れ出す。

「っ……あ、はぁ！……っ……」

透明な雫が先端からとろりと垂れ、糸を引いて下腹部に落ち、水たまりを広げる。脈動に合わせて、あふれ続ける。

指が動くたび、ぬるりと広がり、甘い痺れが背骨を駆け上がり、腰が勝手にくねる。

焦らされた分……こんなに……恥ずかしい……



でも、ゆうこ姉ちゃんの指……気持ちいい……
汁が止まらない……

ゆうこ姉ちゃんの細くて長い指に絡まって……
もっと、塗りたくって……ください……

「すごい。我慢汁、とまんないね。そんなに興奮してるんだね……」

右耳に熱く囁かれ、頭を撫でられる。

あおいが顔を隠す。

指で陰茎を摘み、優しめの圧でゆっくりストローク。

時々、我慢汁を絡めて、手のひらで亀頭を包み、ぬるぬる塗りたくり、敏感な鈴口を親指でゆっくりくちゅくちゅと優しくこね回すが、すぐに離す。

「あっ！………あ……はあ……っ」

ゆうこ姉ちゃんの指……こうちゃんより細くて、速い……刺激が………芯まで………亀頭が
びりびりして、我慢汁が噴き出して……

「ごめんごめん。出ちやいそうだよね。がまん。がまんね」

あたしの手なのに……

あたしの意思で動かせるはずなのに……

でも、今、ほんのわずかに動かしただけで、出そうになるのが怖かった。おちんちんの内側が、熱くうねって、精液が込み上げてくるのを感じる。手のひらの中で、びくびく痙攣して、汁をどくどく吐き出してる。

ゆうこ姉ちゃんの目の前で、あたしはオナニーするという恥ずかしさ。

ゆうこ姉ちゃんの目線があたしのおちんちんとあたしの目を交互に見つめて。ゆうこ姉ちゃんのシャンプーの甘い香りが…

もう…興奮する……！

動かしたら……すぐ出ちゃう……

鈴口がばくばく開いて、汁が手の指をぬるぬるに……

腰が勝手にくねって、指が震えて……

耐えられない……

「……動かしたら、どうなるか、わかるよね？」

うん……

「……ちよつとでも擦れたら……たぶん、出ちゃう」

「でも、だめなんだよね？ 出したら」

……うん、だめ。

あたしは、首を縦に振った。

「えらいね、ちゃんと触ってるのに、動かさないで」

うれしい……でも、つらい……

えらいねって……こうちゃんの言葉……おちんちんが反応して、汁が溢れて……嬉しいのに、動かしたくて、指が震えて……手のひらのぬるぬる感が、たまらない……

…気持ち良くなりたい。でも…

……動かしたら、終わり。

そう言い聞かせて、自分の左手は握りしめてる。
ふるえてる。

でも、もう何分も、ずっと動かさずに我慢してる。

直立に勃起した陰茎を指先で支えて、動かさない。

そんな自分を、無言で見られる興奮…

恥ずかしいのに…

ただ、尿道の先端から、透明な液が、だらだら垂れてくる…

手のひらをぬるぬるに汚して、甘い匂いが部屋に広がる。

おちんちんの皮膚が、手のひらにびったり張りつき、脈動が指の腹にドクドク響く。

「ねえ、あおい。見てて」

……え？

視線を上げると、ゆうこ姉ちゃんが少しだけ頬を赤らめて、
あたしの目をまっすぐ見ていた。

「ずるい。あおいばかり気持ち良くなってて。……あたしも、見てるだけじゃ、限界なの」

ゆうこ姉ちゃん……？……

あたしを見て……興奮してるの……？あたしのおちんちんを自分で包んでるあたしを見て……？

おちんちんの熱が、手のひらにじんわり広がって、びくびく震えて……我慢汁が手の指を伝って垂れて……

「だから、ちょっとだけ……あたしも、好きにしていいい？」

そう言ったゆうこ姉ちゃんは、あたしの横で――

少しずつ、左足をベッドに乗せて、あたしに見せつけるように股を開き、右手の指先をゆうこ自身の開いた太ももに沿わせていく。

「見てて。……目、そらしちゃダメ」

やだ……だめ、見たら……あたし、我慢できなくなる……

おちんちんが、びくんと跳ねて、手のひらの中で熱く脈打つ。
手のひらのぬるぬる感が、指に絡まって、甘い摩擦が生まれる。

でも、ゆうこの声は優しくて、

まるで、「一緒に落ちてよ」って誘ってるみたいで……

でも、あたしは目を逸らせずにいた。

さっきはただ、自分はゆうこ姉ちゃんのオナニーを見てただけ。

でも、今は、ゆうこ姉ちゃんがあたしを見て興奮して、オナニーする…

こ…こんな綺麗な人と……こんな触れるか触れないかの近さで…

………そ…相互オナニー…

「でも、それは、あおいが、自分で決めてね」

決めて……

その言葉に、あおいの手がわずかに震える。

あたしの、意思で？

動かしたら……たぶん、すぐ終わっちゃう…

……自分で、それを“選ぶ”ってこと……？

自分で決めて……ゆうこ姉ちゃんの前で、出したいって……選ぶの……？

ゆうこ姉ちゃんに命令された方がよかった…

じ、自分で気持ちよくなりたいって…

ゆうこ姉ちゃんの前で自分で射精したいって…

ゆうこ姉ちゃんをおかずに、射精したいって…

そう言ってるものでしょ？

そんな……そんなの……

止めてほしい。引き留めてほしい…

……けど……

ゆうこ姉ちゃんは、もう何も言わない。

あたしの目を見たまま、ただ静かに待っている。

どうしたいの？ ——自分の口で言って、自分の手で選ぶなんて……

それが、こんなに苦しくて、

それなのに……どうしようもなく気持ちいい…

握っているだけだった手に、わずかな力が入った。

でも、ほんのすこし。

あたし……動かしたら、きつと後悔する。

でも、もう……寸止めじゃなくて……出したい！気持ちよくなりたい！射精したい！！

ゆうこ姉ちゃんの、なんでも包んでくれる優しさの中で…

ゆうこ姉ちゃんの美しい姿で…

ゆうこ姉ちゃんのそばで…

ゆうこ姉ちゃんに見守られながら…

ゆうこ姉ちゃんの透き通った優しい声…

ゆうこ姉ちゃんの髪の毛の匂い…

ゆうこ姉ちゃんの温もりの匂い…

ゆうこ姉ちゃんの愛液の匂い…

そんなあたしの気持ちを全部知ってて…

ゆうこ姉ちゃんの美しい瞳に…

ゆうこ姉ちゃんに見つめられながら…

い……イきたい………！

「……もう、我慢しなくていいよ」

ゆうこ姉ちゃんは、あたしの耳元で囁いた。
穏やかに、淡々とした声で。

許された……あたし、いま、許されたんだ。
あたし、もう……出してもいいんだ……

そっと、手が動く。陰茎を包んだ皮を、優しく上下にずらした。